

前駐ウクライナ大使松田邦紀氏 を招いての社会科集会開催



①松田氏の講演

「ウクライナ戦争と平和のための外交」

②9年生とシンポジウム形式で対談

テーマ 「戦争のない平和な世の中」

ねらい

- これまでの学びの意味や価値を見つめ直し、よりよい社会を築こうとする主体性を養う

経緯

- 9年生の社会科（歴史分野）の授業の一環として、「戦争のない平和な世の中」をテーマに探究活動を進めていく中で、駐ウクライナ大使を昨年9月に離任された松田邦紀氏が帰国していることを知り、新たな視座や価値観を獲得に向け、ぜひ世界の話伺い、戦争と平和について対談したいと考え





資料提供：NHK



資料提供：FBC放送



資料提供：福井テレビ

外交で戦争終わらせる動き

福井大付属義務教育学校でシンポ

前駐ウクライナ大使・松田さん解説



平和シンポジウムで、戦争をテーマに生徒たちと意見を交わす前駐ウクライナ大使の松田さん。福井市の福井大付属義務教育学校で

た。

二度と繰り返さないようにするのも外交の役割とし、各国がウクライナの安全を担保する「安心の保証」と侵略国の罪を裁く仕組みをつくり、侵略を思いとどまらせる「抑止力」が重要とした。

生徒からの「正しい戦争はあるか」という問いに、松田さんは「21世紀において正しい戦争はない。国際法で戦争は違法。唯一、侵略された時の防衛戦争だけは許されているが、それも正しいとは言われていない」と強調した。登壇した9年生の松田雅晴さん(15)は「人ごとだと思っていたが、日本にも大きな役割があることを知った」と理解を深めていた。(堂下佳鈴)

ロシアによるウクライナ侵攻を題材に、平和について考えるシンポジウムが28日、福井市の福井大付属義務教育学校であり、同校出身で前駐ウクライナ大使の松田邦紀さん(66)が外交官として見たウクライナ情勢について解説し、生徒たちと意見を交わした。

聴いた。シンポジウムは9年生代表の4人も登壇し、対話形式で進められた。

松田さんはウクライナ侵攻が始まる4カ月前の2021年10月から3年間、大使を務めた。ロシアによる侵攻については「21世紀に起こることは思わない悲劇が目の前で起きた」と表現。「戦争は避けられないのでは」と考える一方「最後の最後まで諦めてはいけない」とロシアに圧力をか

け、先進七カ国(G7)の大使らと話し合いを重ねたという。

ただ、外交で侵略を思いとどまらせることは失敗。その後は、日本や米国、ヨーロッパ各国がロシアに一刻も早く戦争をやめ、和平のための話し合いをするよう要求した。3年半を経て、軍事力ではなく、外交によって「この戦争を終わらせる動きが出てきている」と現状を説明し

県内ワイド

戦争ない世界どう実現

「戦争のない平和な世の中」を探究テーマにしてきた福井大附属義務教育学校9年生が28日、同校出身で前駐ウクライナ大使の松田邦紀さんを招き、生徒と議論するシンポジウムを開いた。外交官として戦争の当事者国と向き合った松田さんからの生の声を聞き、生徒たちは海外の戦争でも自分たちが取り得る防止策を表明し、国同士の問題を戦争以外の手段で解決を目指す重要性を考え合った。

(谷口春馬)

9年生は1学期の社会科で、日清・日露戦争や第一次世界大戦を取り上げ、各国の立場や歴史的背景を考察し「なぜ戦争は起きたか」を検証し議論してきた。シンポジウムはその集大成として、生徒代表4人が登壇。ロシアのウクライナ侵攻下で職務に当たった松田さんと意見を交わし合った。

松田さんは、開戦前にはロシアへの圧力をかけ戦争回避に努めたこと、開戦後はウクライナ支援に奔走したことなど、日本の外交官として果たしてきた具体的な活動を紹介。「今回の戦争を法で裁く準備が進められている。同じ過ちを犯せば罪に問われると国際社会に示すことが、将来の戦争抑止につながる」と語った。

福井大附属生 前駐ウクライナ大使と対話

「自分にできること」表明

「戦争を避けるために何ができるか」との議題では、生徒たちは「若いうちから異文化交流を重ね、海外への理解を深める」「戦争がなぜ悪なのか、自分ごととして考えての発信が大事」「今日聞いたリアルな話を視聴した」。

伝えたい」などと「自分たちができること」を表明した。

松田さんは「将来、どんな仕事に就いても国家の一員であり責任がある。今から何ができるかを考え、自分で情報を集め考える力を養ってほしい」と呼びかけた。

シンポジウムは9年生全員が聴講し、6・8年生の児童・生徒もオンラインで視聴した。



ロシアのウクライナ侵攻で、外交官として果たした役割を話す松田さん



前駐ウクライナ大使の松田さん(左)と戦争抑止や果たせる役割を考え合う生徒たち 28日、福井大附属義務教育学校

前駐ウクライナ大使松田邦紀氏を招いての社会科集会開催

日時

令和7年4月からの9年生社会科（歴史分野）の学びの一環として、社会科集会（令和7年8月28日（木） 第4校時（11:10～12:15））を実施。

ねらい

世界で活躍した人と対話することにより、社会科学習で自分たちが学んできたことの意味や価値を見つめ直し、地球社会に生きる一員として、自分や社会にできることを考え、よりよい社会を築こうとする主体性を養う。



内容

9年生は社会科（歴史分野）の授業で、「戦争のない平和な世の中」をテーマに探究活動を進めていった。その中で、「戦争をなくすために、自分たちにできることはないのだろうか？」という問いをもつことになる。そして、第二次世界大戦が終戦し、世界は平和に向かっていくと考えたが、現実には世界には様々な課題が残り、現代でも戦争がなくなる原因についてさらに追及していった。戦争と平和について学び、戦争のない社会について探究を深めていく中で、駐ウクライナ大使を昨年9月に離任された松田邦紀氏が帰福していることを知った。松田邦紀氏が本校出身という繋がりを感じながら、新たな視座や価値観を獲得に向け、ぜひ世界の話をつき、戦争と平和について対談したいと考え社会科集会を開催した。会



は、9年生と松田氏のシンポジウム形式で対談という形で実施され、6～8年生は、オンラインで聴講した。

成果

会の序盤は松田氏から、「ウクライナ戦争と平和のための外交」をテーマに聴講した。講演の中には、「外交官の役割」や「ウクライナ戦争の開戦前から現在に至るまでの経緯や世界と日本の関わり」が紹介され、子供たちは、これまでの学びや自分たちの生活と照らし合わせながら話を伺う姿があった。その後、4人の生徒代表者と松田氏の対話も行われた。子供たちの中では、「自国ファーストの考え方を改めないといけない」という結論に至りながらも、当初からあった、「自分たちができることはないか」という問いに対し、「投票に行くことで政治参加する」「多様性を尊重する／そのためにまずは『ちがう』ことに寛容になる」といった意見を持つことができた。最後に、「誰が悪いのか、といった短絡的な原因追及でなく、自分に何ができるのか、ということを一一人一人が考え、主体的に行動することが大切だ。」と代表生徒が語り、会を閉じた。現場で活躍された生の声は、きっと生徒たちの深い学びにつながったことと思う。生徒が「平和」を考えるにあたり、これまでの学習の価値や意味の捉え直しと新たな学びを得る場となった。

県内の報道関係（新聞社・放送局）の取材を受け、この取組について広く周知できた。